

# 清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第42号

2018年3月17日

## マタイ受難曲 各論-13 (第49, 50, 51, 52, 53, 54曲)

**第49曲 アリア「愛のために、愛するがゆえに」**(ソプラノ、フルート1、オーボエ・ダ・カッチャ1,2、3/4、イ短調)  
バロック音楽の基礎・土台と言うべき通奏低音を欠く、特異な編成(バセットヒェン)のアリアです。しかもソロ(ソプラノとフルート)は高声、和音で伴奏する2本のオーボエ・ダ・カッチャは中音域の楽器ですから、このアリアは終始支えのない不安定な構造の中で歌われます。低音域の欠落はイエスの地上性の消失ともとれます。悲しみをたたえたフルートのソロに乗って、ソプラノが死にゆくイエスへの愛と別れを歌います。ゆったりしたテンポの採られることが多いこのアリアですが、その中でも重要なことは「愛 Liebe」「死ぬ sterben」「永遠の ewig」「刑罰 Strafe」には長い音価(5拍から14拍)が当たられて強調されます。24, 53, 56小節にある”sterben”の語尾は、フェルマータを伴う総休止(ゲネラルパウゼ)によって、その都度無音の空虚な時間を作り出します。そして「罪を何一つ知らないお方なのに Von einer Sünde weiß er nichts」の部分でフルートは沈黙し「何一つ nichts」の言葉が強調されます。

前後に「Laß ihn kreuzigen! 奴を十字架につける!」と叫ぶ群衆の合唱を置いた場面で歌われるこのアリアは、そこにだけは群衆の声に耳を貸さず、イエスをその身に引き寄せ悲しむ人の心が、静けさに満ちた場所を作っているかのようです。

### 第50曲 総督ピラトの審問と磔刑判決-3(エヴァンゲリスト、ピラト、群衆)

第47曲でピラトの発した問い「一体(彼は)どんな悪いことをしたのか」に対する群衆の答えは、ますますいきり立った「Laß ihn kreuzigen! 奴を十字架につける!」という叫びです。もうイエスが何をしたのかは問題ではありません。ピラトの法廷はただただイエスを葬り去らねば気が済まない群衆の狂気に支配されました。エスカレートする群衆の叫びをバツハは同じ音型で、そして第45曲(イ短調)より全音高い調性(ロ短調)で表現します。

手のつけられない状況にピラトは無力に陥り、群衆の前で手を洗って(自分は責任が持てないという意味表示)言います「この人の血に私は責任がない、おまえたちの問題だ!」。突き放すピラトの言葉は1オクターブの上昇によって表現されます。裁判権をピラトから奪い取った群衆は勝ち誇り、奢りに満ちた声で「Sein Blut komme über uns und unsere Kinder! 奴の血は我々と我々の子孫にかかってもよい」などどうそぶきます。合唱IとIIが同時に同じ音を(つまり4声で)歌い出し、3小節目(21小節)からはフガート(小さな、未完のフーガ)となります。テノールに始まる主題は下降と上昇を繰り返し、憎しみに満ち血に飢えた群衆の、高ぶる感情を表わしています。

気おされたピラトはやむなくバラバを釈放し、イエスを鞭打って十字架につけるべく引き渡すのでした。

### 第51曲 アリオソ「憐れんでください、神よ!」(アルト、弦楽器、通奏低音、4/4、ト短調)

通奏低音がト短調の属音であるハ音をオルゲルブント(長い音価)で鳴らす上に、ヴァイオリン1, 2とヴィオラが属7の和音で鞭打ちを象徴する付点リズムを刻みつけます。アルトの音域は大きく上下し、音程の跳躍や頻繁な中断を挟みつつ、「おお鞭打ち、おお殴打、おお傷! O Geißelung, o Schläg, o Wunden!」と戦慄し、「刑吏たちよ、やめなさい! Erbarmt euch, haltet ein!」と激しく訴える歌詞の情念を再現します。

### 第52曲 アリア「私の頬の涙が何ひとつ役に立たないのなら」(アルト、弦楽器、通奏低音、3/4、ト短調)

ダ・カーポを入れれば155小節にわたる長大なアリアです。編成は第51曲と同じで、通奏低音は弦楽器と共に前曲から続く鞭打ちのリズムを、3度平行やユニゾンで演奏し、時に一定の長さで拍の頭だけを刻んで行きます。このアリアに先立つアリオーソで同じ女性(シオンの娘)が必死に「鞭打ちをやめて」と刑吏に訴えた叫びはついに聞き入れられず、今や苦痛と衝撃に打ちひしがれた彼女は、もはや自分の命を差し出すほかないと声を絞り出すようにこのアリアを歌います。同じモチーフが繰り返し現れる音楽は「何も得られない nichts erlangen」むなしさを感じさせます。ところでこのアリアは、低声(アルト、バス)と弦楽器という編成で第一部の第23曲と好一対をなしています。歌詞においても第23曲は「喜んで私も十字架と苦い杯を受けよう」と歌い、第52曲では「この心を犠牲の受け皿に使ってください」と歌うのです。

鞭打ちの音は器楽にのみ現れ、歌唱には全く反映しません。ここでは器楽が刑吏を、歌唱が信徒を演じ、両者は立場を全く異にします。これを磯山氏は「表現の意味深い重層性」と表現しました。そして第51曲のアリオーソと第52曲のアリアは時間的に、内容的に、音楽的に、他のレチタティーヴォとアリアには見られない強い関連性を持っており、それを象徴するのが「鞭打ちのリズム」です。

### 第53曲 嘲弄(エヴァンゲリスト、兵士たち)

兵士たちはピラトから引き渡されたイエスを総督の官邸に連行し、着衣を剥いで緋色の外套を着せ、頭に茨の冠を載せ、右手に葦の棒を持たせます。それは「自称ユダヤの王」に似つかわしい格好をさせ、からかい、馬鹿にし、侮辱しようとするためです。そしてイエスの前にひざまずき「Gegrüßet seist du, Jüdenkönig!ごきげんよう、ユダヤ人の王様！」と嘲ります。それから唾を吐きかけ、葦の棒で頭を叩いて痛めつけます。兵士の嘲りは2群の合唱によって歌われ、「ごきげんよう」と3回呼び交わした後、最後に声をそろえて「ユダヤ人の王様」と叫びます。

そのあとエヴァンゲリストが「葦の棒で頭をたたいた」と告げると、ただひとり通奏低音がフェルマータのついた全音符でこの曲の最後の小節を演奏します。この音は聴く者にとって大変長く感じられるはずで、演奏者も聴衆も、目の当たりにするイエスの屈辱を凝視せざるを得ない状況に置かれてしまうのです。

### 第54曲 コラール「おお御頭(みかしら)、血と傷にまみれ」(4声単純コラール、器楽全奏、4/4、ニ短調)

マタイ受難曲全曲を通じて5回現れる受難コラールはここで初めてその第1節と2節が歌われます。始め嬰ハ短調(第15曲)、そしてハ短調(第17曲)、ロ短調(第44曲)と半音ずつ下がってきたこのコラールの調性は、ここでニ短調という最も高い調を採ります(このコラールが最後に現れる第62曲は最も低いイ短調です)。なお、これらの調性を平行長調(例えば第54曲はヘ長調)と取る向きもあります。ヤコービは調性の高さ(例えばテノールが14小節でイ音まで上昇する)が、このコラールに痛ましさ(「O Haupt voll Blut und Wunden 血と傷にまみれ」「mit einer Dornenkron 荊の冠をかぶせられ」「bespeit 唾を吐きかけられ」: 筆者注)と輝かしさ(「mit höchster Ehr und Zier 最高の名誉で」「Du edles Angesichte 気高い顔」「dem sonst kein Licht nicht gleicht どんな光も及ばない」: 筆者注)を与えていると言います。「おお御頭」と歌い出すことと合わせ、バッハがこのコラールを(兵士がイエスの頭を叩く)この場面で、最も効果的に使おうとしたことは間違いのないでしょう。(なお演奏会のチラシに使われているオランダの画家ホントホルストの絵はこの場面を描いています。)

【後記】 前回「発行の間隔を密にする」と申し上げたのにそれが実現できず、本番まで40日あまりとなった今日に至っても各論はまだあと14曲を残しています。いよいよ時間との競争になってきました。できれば今月中にもう1回、4月に2回の発行で何とか完結させたいと思っています。 (新井治男)